

「能登半島の今 (2)」

お茶の水女子大学サイエンス&エデュケーション研究所

田中 千尋 Chihiro Tanaka

1 年半以上前の震災の影響がまだ色濃く残っている能登半島にあっても、ところどころほっとするような風景にも出会えます。その一つが「棚田 (たなだ)」です。能登半島の海岸線沿いの地域は、山の迫ったもともと急峻な地形のところが多く、今でも何か所かに棚田の風景が残っているのです。



一つ目は「大笹波水田 (おおさなみすいでん)」です。国道 249 号線から海岸沿いの脇道にそれたところにある、美しい棚田です。幹線道路からはずれているので、訪れる人も稀な不遇な棚田です。その分静かに景色を楽しめる景勝地です。



大笹波水田はおよそ 180 枚の棚田で構成されていますが、展望スポットから見えるのはその一部です。最も美しいのは、田植え前後の水が張られた時期だそうです。この時期に棚田の上段部から望むと、遠くに海が見える、すばらしい景観だそうです。次回はそんな時期の夕暮れ時に行ってみたいと思いました。



棚田の展望台から北側を見た風景です。狭い平地に小さな集落があり、その向こうに急峻な海岸段丘が見えます。この崖も、震災で一部が崩落したそうです。



「鳴き砂の浜」というところにも行ってみました。特別な結晶の集まった砂で形成された砂浜で、歩くと「キュッキュッ！」と鳴くのだそうです。私も試してみましたが、確かに独特の歩き心地でした。しかしぜんぜん鳴いてくれません。あきらめて戻った駐車場の説明書に、「連続したすり足」で歩くと鳴く・・・といった意味のことが書いてありました。



鳴き砂の浜の脇の崖は、震災で大崩落して、そのままになっていました。地震が起きたのが元日で、砂浜

にはほとんど人がいなかったでしょうが、夏の海水浴シーズンだったら、崩落と津波で大きな被害が出ていたかも知れません。



更に北へ進むと、海岸線の様相が一変します。地震による土地の隆起が顕著になってくるのです。



もともと海底だった場所が陸化するという現象は、さまざまな地殻変動の中でも非常に稀なことです。日本列島の長い歴史の中では数えきれないほど起きていたのですが、ヒトの一生の中で出会う確率は極めて低いでしょう。



恐らく手前のテトラポット（波消しブロック）のあたりが本来の海岸線だったのでしょう。現在ははるか

沖まで陸地になっていました。



中でも被害が深刻なのが、漁港の隆起です。この漁港は隆起が最も大きかった地域からは少し離れているのですが、それでも一目で防波堤が浮いてしまっているとわかります。



防波堤のコンクリートには、もともと海面下だった水位の痕跡がはっきり残っています。漁船を係留するブイも、海面から3m以上の位置にあり、船員の乗り降りや、荷物・海産物等の積み下ろしで不可能です。



このような状態から漁港としての機能を取り戻すのは、相当に大規模な工事が必要でしょう。現時点では、その工事の開始すら見られない状態でした。